

動詞の時法の研究(一)

松下大三郎

總説

こゝに動詞といふのは從來所謂ゆる動詞も形容詞も一緒にしていふのである。内面的概念を表はす詞の中で叙述性を持つてゐる詞を總べて動詞といふので、その中時間の形式に由て考へた事件觀念を表はすもの即ち從來の動詞を動作動詞と云ひ、時間の形式に由らずに考へた事件觀念を表はす者即ち從來の形容詞(クシク活)を状態動詞といふ。此の動詞に時法といふ文法的職能がある。從來の説では時法を過去現在未來の三態に分け別に完了といふ一態を立て、總べての時法を現在、現在完了、過去、過去完了、未來、未來完了の六つとし、現在とは現在或は不拘時の事件を表はすもの、過去、未來とは過去、未來の動作を表はすもの、現在完了は現在に於て完了してゐる事件を表はし、過去完了は過去に於て完了して居つた事件を表はし、未來完了は未來に於て完了してあるべき事件を表はすと解釋せられた。例を擧げると

現在

花咲く

月出づ

鳥鳴く

風吹く

現在完了

花咲きぬ

月出でつ

鳥啼けり

風吹きたり

17. 5. 12 29. 12 6. 7

過去	花咲きけり	月出でけり	鳥鳴さき	風吹きさき
過去完了	花咲きにけり	月出でけり	鳥鳴けりき	風吹きたりき
未来	花咲かむ	月出でむ	鳥鳴かじ	風吹かじ
未来完了	花咲きなむ	月出でてむ	鳥啼けらじ	風吹きたらじ

などの類だ。つまり動詞そのまゝの形ならば現在で「ぬ」「つ」「り」「たり」が附いたのが現在完了、現在の形へ「き」「けり」「む」「じ」が附けば過去未来、現在完了の形へ「き」「けり」「む」「じ」が附けば過去完了、未来完了になるのである。

こゝにいふ解釋は一見完全無缺の様であるが、誠に机上の空論であつて其の實際に徴すると色々な不都合が起つてくる。例へば過去の事でも

管仲なかりせば我其れ髪を被りて衽を「左にせむ」。

徳川幕府の成立を聞かば義貞地下に「喜びむ」。

などの様に「左にせむ」「喜びむ」といふ様な未来の形を使ふことが澤山有る。如何に假定の想像でも過去の事件としての想像ならば未来形を使ひ得べき理由は無い。これは「左にせむ」「喜びむ」が決して未来形でないことを證するものでなくて何であらうか。又

昔杞國に人「有り」天の落ちむことを「憂ふ」。

の「有り」「憂ふ」などの様に過去のことに現在形を使ふことがある。苟も昔といふ以上過去の事に相違ない。「有り」「憂ふ」が過去の事件を表はし得る以上過去形とは云はれない。之を歴史的現在などいふ

し或は現寫法などい稱して過去のことを現り見る様に現在形を用ゐるのだと説く者もあるが過去のことを現在と假定する爲に現在形を用ゐることが出来るならば修飾語も「昔」と云はずに「今」と云ふことが出来なければならない。「昔杞國に人有り」と云つても差支はないが「今杞國に人有り」と云つては事柄が全く違ふことになる。これは「今」は現在を表はす修飾語だからである。若し「有り」「憂ふ」が真に現在形であるならば修飾語の「昔」と相容れないことになつて右の例は矛盾した詞になるべきであるのに一向矛盾しない點から考へると「有り」「憂ふ」は決して現在態でないことが分る。又未来の事件でも

私は明日愈「出發します」

貴方は此の夏はどちらへ「入らつしやいますか」

などの様に現在形を使ふ。眞に現在形であるならば未来の事件を表はし得る筈はない。又現在の事件でも

山里の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花を「散りける」

の様に「ける」を使ふことが有る。現在花の散るのを見ていふのであるから花の散るのは現在の事件である。(唯それが自己の智識の過去に於ける缺陷を補ふといふだけである)。「ける」が眞に過去の事件を表はす記號であるならば現在の事件に用ゐるべき道理がない。

英語などを遣る人は常に云ふ、日本語は實に不完全な語である。動詞に整然たる時法がない。過去や未来のことに現在形を使ふ場合が多い。名詞に文法的複数が無いと同じ様に動詞にも文法的時法といふものがないと。若し「……き」が過去形「……む」が未来形「……む」が現在形であるならばそう云はれ

ても仕方がない譯である。

併し「き」や「けり」が過去形でなく「む」や「じ」が未來形でないことは右の例に由つて明瞭である。「さ」や「けり」や「む」や「じ」は決して實際の時を示すものではない。唯時に關して動詞が觀念の運用上事件をどう云ふ風に取扱つてゐるかといふ取扱方を示すだけである。それであるから動詞の時法を過去現在未來などと分けるのは間違つてゐる。過去現在未來は其れは實際の時であつて動詞が事件を取扱ふ取扱方ではない。

併し動詞には實際の時を表はす方法もある。「昔人有り」と云へば過去の事件で「今人有り」と云へば現在の事件である。

僕の病氣の直つた時は花はもう散つて居たと云へば花の散る方が病氣の直るより前である。こういう「時」は實際の時であつて觀念の取扱方に由つて定まるものではない。

そこで動詞の「時法」は二種に分れる。一つは主觀の時法で一つは客觀の時法である。主觀の時法は實際の時に關係なく動詞自らが時を作つてその時に由つて事件を取扱ふものであり、客觀の時法は實際の時に由つて事件を表はすものである。

主觀時法に於ては動詞は時を空間的に考へて居る。時を一つの場所として考へてゐる。思想といふ自己が時間といふ軌道の上を進行して居るものと考へ事件を我が進路の前方に置いて之を迎へるとして考へる考へ方もあり、事件を我が進路の後方に置いて其を顧みるとして考へる考へ方もあり、又事

件を捉へて我が背後へ廻すとして考へる考へ方もあり

一、主觀時法

主觀時法は動作動詞の一文法的職能で説話者が自己の主觀を基準とし事件觀念を自己の時的進路の前方後方或は同位に在るものとして取扱ふものである。

主觀時法に三種が數へられる。一は文語で「ぬ」「つ」「たり」「り」口語で「た」を附ける附けないに由つて區別せられ、二は文語で「き」「けり」を附ける附けないに由つて區別せられ、三は文語で「む」「じ」「まし」口語で「う」「よう」「まい」を附ける附けないに由つて區別せられる。一は送想態非送想態と云ひたいが名稱だけは完了態非完了態でも善いかも知れない。併し完了といふ語の解釋は從來の解釋とは大變に違ふ。二は追想態非追想態である。三は迎想態非迎想態である。

送想態と非送想態

送想態(完了態)は我が思想の時的軌道上に於て事件を背後へ廻して事件と別れ事件を送るとして事件觀念を取扱ふものである。名稱は完了態と云つても善いが完了といふことはもと客觀の時法の觀念で事件が實際に完了するものとして考へられる恐が十分あるからなるべく完了と云ひたくない。事件は實際に完了してもしなくてもそんな事には關係なく唯觀念を取扱ふ上に於て我が思想の時的進行に關して之を背後へ廻して考へるのが送想態なのである。

送想態を示すには文語では

ナ行變格

な に ぬ ぬる ぬれ ぬらく

下二段語

て て つ つる つれ つらく

ラ行變格

たら たり たる たれ たらく

同

ら り る れ らく

を附ける。「ぬ」「つ」「たり」は第二活段へ附け「り」は四活段の第五活段とナ行變格の第一活段へだけ附ける。

口語では第二活段へ

特別ラ行變格

たら たり たり た たれ

を附ける。

「ぬ」と「つ」の區別に關し三矢重松氏は「ぬ」は狀態的で「つ」は動作的だと云つた。如何にもさうに違ひない。一體狀態的動作的といふことは三矢氏の言語を観察する範疇と云つても善い位で三矢氏は何時でもこゝにいふ觀察をする。山田孝雄氏は「ぬ」は動作の主體の勢力を認めずに云ひ「つ」は動作の主體の勢力を認めて云ふのだと云つた。つまり「ぬ」は動作の主體を自然物と見、「つ」は動作の主體を意志體化して觀るといふのであらう。事件を動作と狀態とに分けるのも事件の主を意志體と見るか自然物と見るかに由つて分れるのであるから三矢氏の見解と山田氏の見解とは結果に於て同一である。二氏の説は誠に結構ではあるが、併し余をして云はしむれば二氏の説は「ぬ」「つ」の根本の意義に觸れず

其の末を捉へたものだと思ふ。且つ動作的になるとか主體の勢力を認めるとかいふことは抽象的で意味がはつきりしない。三矢氏は「ぬ」「つ」を完了としその完了は實際の完了だと思つた。客觀的だと思つた。それ故動作的狀態的とのみ考へたのである。山田氏は客觀的時法とは思はなかつた、確に主觀的と思つたのである。山田氏は「ぬ」「つ」は事件の完了を示すものではなくて唯叙述の確めであると思つた。なるほど漢文の矣などは叙述の確めであらう。支那人は「矣」を完了の記號だと思つてゐるが

嗚呼其亦不思而已矣。如古之無聖人、人之類滅久矣。

子言則然矣。宰相則知子矣。如時不可何。

などの様に「矣」は完了を表はしてもその本義は叙述の確めである。併し日本語の「ぬ」や「つ」を叙述の確めであるとするのは違つて居よう。「ぬ」や「つ」が時の觀念に關係がない者とはどうしても云へない。山田氏は「ぬ」や「つ」が實際の時に關係がないといふことに氣が附いて直に時に關係のないものと即斷したものと思はれる。時に關係のないもので唯叙述の確めだと思つたから「ぬ」と「つ」の別を事件の主體の勢力を認める認めないの區別であるとしたのは當然の結果である。「ぬ」と「つ」とは三矢氏のいふ様な客觀時を表はすものでもなく山田氏のいふ様な時に關係のないものでもなく全く觀念の運用上動詞が自ら時を作つて思想自己を時的軌道の上に在るものとして事件觀念を思想の進路の背後へ廻して其れと別れ其れを送るとして事件觀念を取扱ふ記號である。そうしてその區別は「ぬ」は事件を十分背後へ送り切つたとして考へた取扱方を示し「つ」は事件を背後へやつと送つたばかりとしての取扱方を示すのである。事件をやつと背後へ送つたばかりといふことは三種の解釋が釋出せられて三種に利用

せられる。第一は事件を背後へ送るのに骨が折れ大に努力を要したがやつと送つた。骨が折れないならば十分送り切ることが出来る筈であるが骨が折れるからやつと送り得たといふ意味になる。

濡れつゝぞ強ひて「折りつる」藤の花春は幾日もあらしと思へば。業平集

徒然と花を見つゝぞ「暮しつる」今日を限の春と思へば。古今六帖

などは此の第一の解釋の意味の著しく表はれたものである。三矢氏や山田氏の説はこういう點を指したのである。第二の解釋はやつと事件を送つたと云ふことは主観が事件を相手にする意味になる。事件を唯自然の作用と見ずに他の主観として観るのである。相手にするから送るのに手数が掛つてそうすらくと行かないからやつと送つたといふことになる。事件を相手にすると云つても抽象的で不明瞭であるから之を具體的に説明する必要がある。其れには口語の例を引くが善い。

口語には下等な語であるが「やがる」といふ助辭がある。下等な人間は非常に多く「やがる」を使ふ。これはもと「上る」といふ動詞から來たのだといふことである。「何をしやがる」「何處へ行きやがった」などといふ。これは事件を相手にするのである。人に對するばかりではなく物に對しても使ふ。又西部地方には第二活段で「居る」をつける云ひ方がある。

彼奴とうゝ「参りやあがつた」(参り居つた)。

畜生又雨が「降りやあがる」(降り居る)。

昨日飯前に出たら腹がへつて「來やあつて」困つて仕舞つた。

これは天氣や空腹を對手にするのである。事件を自分に對して自分に打つ突かつて來るものとして對

手にするのである。例示に於て、失敬な奴だ、馬鹿な奴だ、面白い奴だ、可愛い奴だ、うい奴だなどと云つた様な取扱方である。併し此「やがる」は譏る意味や、笑ふ意味や、怒る意味がある。若便利な場合ならば降るかと思つたが「晴れて呉れて」助かつた。

などの様に「呉れる」を使ふこととなる。「やがる」「呉れる」は他物の動作に就ていふのであるが自分の動作ならば「やる」を使ふ。

さあ一つ「寝てやらう」かな。

などといふ。又書簡文では「申す」を使ふ。妻が外に在る夫に與ふる手紙として

子供等も無事に毎日學校に「通ひ申し候」。

などといふ。こういう様な例で事件を相手にするといふこの意味は明瞭だらうと思ふ。唯「やがる」「やる」「くれる」「申す」などは相手にするばかりでなく譏る意味や卑下の意味や其れゝゝ特別の意味をも併せ有してゐるからさういふものを除いて考へなければならぬ。「つ」は此の事件を相手にする意味だけに利用される。

誰しかもとめて「折りつる」春霞立ち隠すらむ山の櫻を。古今集

紫の色の深きは水底に「見えつる」藤の花にざりける。躬恒集

待つ人も來ぬものからに鶯の「鳴きつる」枝を「折りてける」かな。六帖

起きもせず寝もせず夜を明しては春のものとして「詠め暮しつ」。業平集

梓弓押して春雨今日ふりぬ。明日さへ降らば若菜「摘みてむ」。古今集

の「」などを見ても分る。確に事件を對手にしてゐる。之を「ぬ」に換へては相手にしないことになつてまづい。

誰しかもとめて折りつる……

誰が見附けて折りやあがつた(折り居つた)

水底に見えつる藤の色……

今水底に見えやがつた(見え居つた)藤の花

鶯の鳴きつる枝……

鶯の鳴きやがつた枝(鳴き居つた枝)

春のものとて詠め暮しつ……

詠め暮し申し候

明日さへ降らば若葉つみてむ……

一つ若葉を摘んでやらう

勿論「つ」を「やがる」「や申す」と同じだと云ふのではない。「やがる」の意味から讀る意味を除き「申す」から卑下の意味を除いて唯對手にする意味だけを探るのである。もし「つ」を直に「やがる」と譯したと解釋したら余を以て飛んでもないたはけた事をいふ奴だと思ふに相違ない。十分意味を味つて誤解のない様に讀んで貰いたい。これが「ぬ」になると對手にする意味がないから「やがる」「や申す」と對照することが出来ない。

梅の花立ちよるばかり有りしより人のとがむる香にぞ「しみぬる」。六帖

春立ちて日は「經ぬれ」ども鶯の鳴く初聲は今日ぞきゝつる。六帖

の「しみぬる」「經ぬれ」などでも分る。三矢氏が「つ」は動作的であると云つたのも山田氏が「つ」は動作の主體の勢力を認めていふ辭だと云つたのも此の第一第二の利用を捉へたものである。併し動作的と主體の勢力とか云つても語が抽象的であつて如何なる點に於て動作的であるが如何なる點に於て主

體の勢力を認めるかといふことが明瞭でない。「鶯の鳴きつる枝」などはそれでも分る様だが「水底に見えつる藤の花」などは「見えつる」がどうして動作的であるか、藤の花のどういふ點に勢力を認めるかが明瞭でない。こういうのは藤の花の動作を我に對してぶつつかつて來るものとして其れを對手にする(他の主觀として取扱ふ)といふ具體的説明の上に始めて動作的とが主體の勢力とかいふことが有意義になると思ふ。それにしても此等は「つ」の意義の一利用である。

第三の解釋は事件をやつと背後へ送つたといふことは送別の挨拶がやつと済んだばかりであるから送られた事件はまた二三歩歩き出しただけでまだ遠く去らずつい其處に見えて居ることになる。此の利用は如何にも人をして完了の即時であるかの様に感ぜらしめ得る。

時鳥「鳴きつる」方を眺むれば唯有明の月を殘れる。

待つ人も來ぬものからに鶯の「鳴きつる」枝を折りてけるかな。

の「鳴きつる」は今鳴いたばかりでその聲は耳に残つてゐる様に感ぜられる。此れは送想の不十分を利用したもので事件がまだつい其處に在る意味である。そういふ意味は前に擧げた諸例にも皆ある。凡そ「つ」を用ゐれば第一第二第三の意味は必皆伴ふのである。唯その三つの中でどれが著しく感ぜられるかといふにある。動作的又は主體の勢力と云つては第一第二の意味の或る場合には適當であるが第三の意味には縁が遠からうと思ふ。

從來の説にも「ぬ」は自然的「つ」は意志的だと云つた説はある。又「ぬ」は完了の若干後を表はし「つ」は完了の即時を表はすと云つた説はある。併し此ういふ説は「ぬ」「つ」を實際の完了、客觀的事實と思

つていふのであるから矛盾を生じて来る。「ぬ」や「つ」は唯觀念の取扱の上に於てその送想が十分であるか不十分であるかで實際の時、實際の事件の完了をいふのではない。實際は完了後であつても完了の數年後であつても觀念の取扱方としては十分主觀の時的進路の背後へ送り切つて仕舞ふことも出来又やつと送つたとして考へることも出来るので、實際の時とは一致しない場合が多い。幸に實際の時と一致した場合には從來の説でも説けるが一致しない場合には矛盾となる。時鳥鳴きつる方などは實際と觀念の取扱方が完了といふ點に於ては一致してゐるから之を完了の即時と解して都合が善いが「誰しかもとめて折りつる」や、

夏衣立ちてし日より郭公とく聞かむとぞ「待ち渡りつる」。實之集

年毎に棚機つめを祈りつゝ多くの秋を「すぐしつる」かな。兼盛集

などは完了の即時とは云へない。「濡れつゝぞ強ひて折りつる」などは意志的と云へるが「水底に見えつる藤の花にざりける」などは意志的とは云へない。實際の時實際の事件として區別すれば決して「つ」を完了即時的意志的といふことは出来ない。「ぬ」「つ」の別は實際の時、實際の自然的意志的などには關係なく唯人の思想上に於て觀念を取扱ふのに十分後方へ廻すか一寸後方へ廻すかに在る。

「たり」は「てあり」の約音、「り」は第二活段の語尾と「あり」との約音である。例へば「行きたり」は「行きてあり」の約、「行けり」は「行きあり」の約音である。古くは「行けり」を「行かり」とも云つた。「たり」と「り」は語原が「あり」であるから元來の意味は既然態であるが、それを送想態にも使ふのである。その例として「ぬ」や「つ」の様な區別はなく單純に送想を表はす。

「櫻花千草ながらにあるなれど誰かは春を「恨み果てたる」。素性集
吹く風を鳴きて怨みよ、鶯は。我やは花に手だに「ふれたる」。古今集
浦に焼く藻に住みつゝぞ燃え渡る。あまのすさびに「刈れる」みるめは。表性集
秋の夜の月とはよそに聞きつれど時に「あへる」は今宵なりけり。公忠集

口語の「た」は文語の「たり」であるがその活用は
た　　た　　た　　た　　た　　た
た　　た　　た　　た　　た　　た
た　　た　　た　　た　　た　　た
た　　た　　た　　た　　た　　た

である。此の活用を

と思ふのは誤である。「た」の第三活段には「たり」がある。文語文法にのみなれた人は終止格は第三活段にきまつてゐる様に考へて第三活段を「た」だと思ふのであるがそうではない。口語の終止格は第四活段がある。一轉終止格には第三活段と第四活段と第五活段とか用ゐられる。文語は大抵の場合には第三活段を終止格にするが緩く徐ろに了解せられる様に叙述する場合には第四活段を用ゐる

降る雪のみの白衣打ち着つゝ春來にけりと「驚かれぬる」。

我が宿の梅の立枝や見えつらむ、窓の外に君が「來ませる」。

などの様に第四活段を用ゐる。必しも「の」「が」「ぞ」「や」「か」「なむ」の有る場合だけではない。一旦叙述し切つたことがらに對してその叙述的運用をも込めて一つの物と見るから第四活段を用ゐて觀念を實質化してその實質を指示するのである。「驚かれぬる」を一つの事として驚かれぬるといふ事を指示す

る。「一寸」驚かれることよ」と云つた様な具合になる。併し「こと」といふと名詞になるが「驚かれぬる」は名詞ではない。名詞ではないが、一つの實質として取り扱はれてゐる。口語の終止格は即ち此の第四活段を用ゐるのである。口語の終止格が第四活段であることは三矢氏が始めて發見された説である。「た」が既に第三活段でないとするれば口語の「た」には第三活段がないかといふとそうでない。矢張「た」がある。此の「た」には二種の用法がある。第一は文語と同様終止格であるが、これは唯稀に用ゐられるだけである。

「おい一寸其處を」といたり。

「さあ其の石(墓)を」繼いだり。

などは實際の意味は命令であるが形式は終止格である。

お胸を一本「占めたり」。

おつと「しくじつたり」。

などもやはり口語であるが併しこれらは稀に用ゐられるのみだ。第二の用法は並列態である。

「行つたり戻つたり」する。……………「行きつ戻りつす」

「本を讀んだり」「字を書いたり」する。……………「書を讀みつ字を書きつす」

「降つたり照つたり」する。……………「降りつ照りつす」

この用法は廣く用ゐられる用法である。そうして文語でも「つ」の第三活段がやはり並列に用ゐられることは右の例の下段の「」の通りである。口語だけの用法ではない。一體第三活段が並列に用ゐられる

「こと」は「たり」だけではない。「なり」もそうだし、ク活シク活もそうである。

親爺も「吾なり」息子も「吾なり」して代々貯めてばかり居る。

彼處は道は「惡し」電車は「無し」して一寸行かれない。

「たり」や「つ」の並列態を見るも「た」や「つ」の意味が實際の完了でないことが分る。「行つたり戻つたりする」「行きつ戻りつす」の「たり」や「つ」がどこが完了であるか。ちつとも完了して居ない。それであるからこういうものを完了の助動詞といふことは間違つてゐる。唯思想上に於て事件を主觀の後方へ送るとして考へるだけである。觀念の取扱としては「行く」「戻る」の觀念が主觀の背後へ送られてゐる。思想上の取扱としてはその事件は完了したものゝ様に考へられてゐる。併し觀念の取扱だけそうであつて客觀における事件は決して完了ではない。

一般の動詞は口語では第一活段へ「ば」を附けないが「な」と「だ」だけは特別に第一活段へ「ば」を附ける。

花が「咲いたらば」見に行かう。君が「來たらば」一緒に出懸けよう。

といふ様にいふ。文語では一般の動詞へ「ば」を附けるがそれは皆送想の意か「なり」の意がある。「花咲かば見む」は「花咲きたらば見む」の意であり、「君來ば待たむ」は「君が来るならば待たむ」の意である。文語で一般動詞の第一活段へ「ば」を附けるやうな場合には口語では「た」や「だ」を附けた上で「ば」を附けるのである。併し「ば」は省略することもある。

「たれ」へ「ば」を附けると「たれば」であるがこれは音便で「たりやあ」となり更に「たら」となり今では

専ら「たら」と云ふ。併し下へ更に「ば」を附けて「たらば」と云ふこともある。そこで「たらば」には第一活段のと第五活段のと兩方有ることになる。「花が咲いたらば見よう」は第一活段で「花咲きたらば見む」の意である。「昨日上野へ行つたらば花は散つて居た」は「昨日上野に行きたれば花は散りてありき」の意で第五活段だ。

以上舉げた送想態の例は「たらば」と並列態の「たり」「つ」を除く外は現在の事件に就いて云つたのであるが、「ぬ」「つ」「たり」「り」及び「た」は未來の事件にも過半の事件にも不拘時の事件にも用ゐられる。現在の事件を表はす場合には觀念運用上の送想が大抵事實上の完了と一致するが不拘時の事件や未來の事件を表はす時には觀念だけ送想されて事實上の完了を表はさない場合が多い。前の「往つたり戻つたりする」の「行つたり戻たり」などは不拘時の事件であつて事實上の完了になつて居ない。又未來の事件でいふと

梓弓押して春雨今日降りぬ。明日さへ降らば若菜「つみてむ」(摘んでやらう)。古今集

住ひわびぬ。今日を限と山里に身を隠すべき宿「求めてむ」(求めてやらう)。業平集

花見つゝ惜むかひなく今日暮れてよその春とやあすは「なりなむ」(なつてしまはう)。六帖

などの例は事件の完了する意味はない。唯思想上に於て送想的に取扱ふだけで事件そのものの完了する意味はない。そうしてこの「てむ」「は」「つ」の第一活段へ「む」のついたものであつて事件を相手にする意味がある。口語でいへば一つ違つ附けようといふ様な意味である。「なむ」の方は「ぬ」の第一活段へ「む」の附いたものであつて仕舞ふだらう位の意味である。仕舞ふといふと完了と思ふ人が有るか

も知らないが「仕舞ふ」は完了の意味はない。

そんなに怠けると「落第して仕舞ふ」

碌々見ない中に櫻が「散つて仕舞ふ」

「しまふ」は事件が逸走して片附く意味であつて完了の意味はない。唯假の事件でなく眞の事件であつて取る返しが附かなくなるといふ意味である。「仕舞ふ」の附いた動詞は之を逸走態と名づくべきである。やはり觀念の取扱方を示すもので事件そのものの逸走ではない。逸走態は口語にのみ存する動詞の運用であつて文語にはない。文語の送想態の動詞が未來の事件を表はすやうな場合に口語では逸走態を使ふのである。

動詞の文法的職能には縦的職能と横的職能との二種がある。動詞の、連詞又は斷句中に於ける立場に關係の無い職能を縦的職能と云つて立場に關係する職能を横的職能といふ。連詞又は斷句中に於ける立場とは主語、修飾語、客語などの様に他詞に對して從屬するとか獨立語の様に他詞に對して從屬しないとかいふ様なことをいふのである。動詞の時法などは縦的職能であつて立場に關係がない。「行きぬ」「行きつ」などは送想態であるが、これは活段を換へて連體格(行きぬる)機會格(行きなば、行きぬれば)となり從屬語になつても、終止格(行きぬ)となり獨立語になつて斷句中に於ける立場が變つても、送想態であることには變りはない。こゝにいふ職能は縦的職能である。所謂助動詞は縦的職能を表はすものである。立場が變れば助動詞は活用を換へ或は靜助詞が附くまでである。所が終止格、連體格、機會格(……ば)といふ横的職能は斷句中に於ての立場に關係する。終止格の詞は斷句中に於て必ず

獨立語になり、連體格の詞は連詞中に於て必ず他詞の體に從屬して修飾語或は補充語となる。それであるから格といふものは横的職能である。

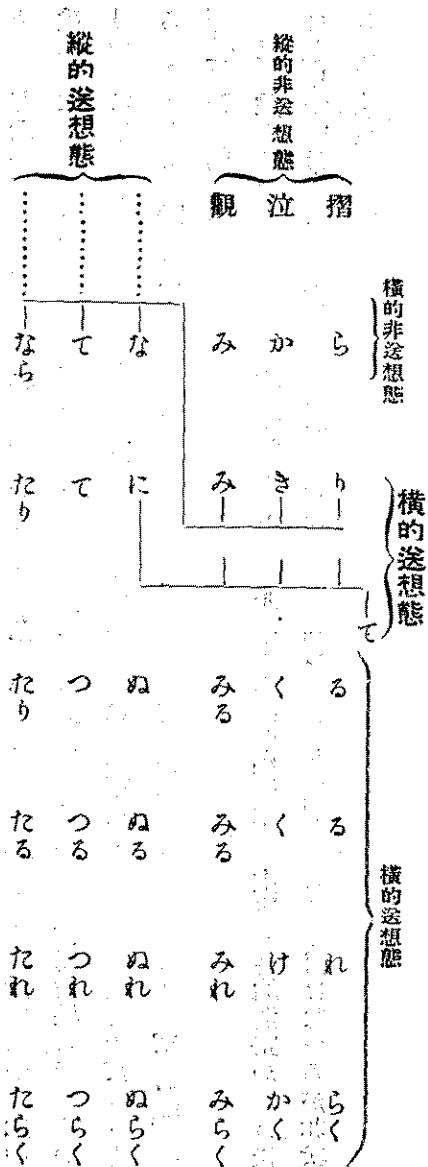
送想態は「ぬ」「つ」「たり」「り」「た」などで表はすがそれは縦的送想態である。所が横的職能としての送想態といふものがある。動詞の第二活段へ「て」「つ」を附けたものは

墨を「磨りて」字を書く。 月を「觀て」詩を賦す。

「泣きつゝ」語る。 「語りつゝ」歩く。

の「」の様に下の動詞の表はす事件の方法を表はすから方法格と名づける。「墨を磨りて」は字を書くの方法であり「泣きつゝ」は語るの方法である。方法格の動詞は連詞中に在つて必ず他詞の用に從屬する立場に在るべきもので他の立場に立つことはないからこれは横的職能である。そうして方法格其れ自身は常に送想態である。「晝を摺る」といふ事件觀念は「字を書く」といふ事件觀念よりも主觀の背後へ廻されたとしての觀念を表はし「月を觀る」といふ事件觀念は「詩を賦す」といふ觀念よりも主觀の背後へ後送されたとしての觀念を表はすのである。そうして此等は事實に於ても墨を摺る方が字を書くよりも先であつて觀念運用上の送想と事件の先後と一致してゐる。こゝの先後的の方法格といふ「泣きつゝ」語る「など」泣く」と「語る」とは事實に於ては同時であつて先後は無いが觀念の取扱方に於ては「泣く」といふ觀念は主觀の背後へ送られたとしての觀念であるから「泣きつゝ」の様なものを同時的方法格といふは事實に於ては同時であつてゐるが觀念は「泣き」が先で「語る」が後である様に取扱はれてゐる。さう

いふ譯で同時的方法格でも先後的方法格でも方法格は凡べて送想態である。送想態であるが縦的ではなく横的職能だ。



この圖で縦的職能と横的職能との別は明瞭であらうと思ふ。動詞の第二活段は元來横的に送想態である。「て」が附かなくても送想體である。「て」を附ければ其れが明瞭になるまでだ。「ぬ」「つ」「たり」などの第二活段に至つては縦的にも横的にも送想態である。併し方法格自身が横的送想態であるから一般動詞(非送想態の)の方法格を用ゐればその動詞が方法格に在る限りは横的送想態であるから「ぬ」「つ」「たり」を附けた動詞の方法格(縦的にも横的にも送想態なる方法格)といふものは殆ど必要はない。それであるから「つ」「たり」「り」及び口語の「た」には方法格はない。併し縦的送想態の動詞の方法

格を使へは送想が綿密になる。そこで「ぬ」の第二口活段へ「で」を附けた方法格がある。

「ぬ」の下に「つ」たりを附けて「行きに」つ「行きに」たり「り」の下に「つ」を附けて「行けり」つ「行きたり」つなどいふとがある。それは事件觀念とその送想的運用性とを一緒にして一つの事件觀念とみるから更に送想すると出来るのである。「行きたり」は行くといふ事件觀念の送想態であるが「行きたり」といふ一つの觀念として取扱へば「行きたり」つとして「行きたり」といふ事件觀念の送想態にすることが出来るのである。從來「ぬ」の語源を「去ぬ」であると云ひ「つ」の語源を「果つ」であるなど云つた人もあるがそれは怪しいと思ふ。余の考へでは方法格の「て」が元であつて此の「て」に送想的意味があるから之を活用させて「て、て、つ、つる、つれ」とし「つ」は舌端齒根音であるから此が鼻濁音になると「ぬ」になつて音が滑らかになるから送想的意味が十分になつたものだらうと思はれる。そうして同時に活用も「て、て」が「な、に」と變つたのではなからうか。そうすれば「ぬ」「つ」「たり」「り」は皆兄弟である。

以上送想態を論したがまだ非送想態がある。非送想態は事件觀念を主觀の時的進路から背後へ送つたとせずに考へた考へ方である。即ち動詞へ「ぬ」「つ」「たり」「り」「た」を附けないのが非送想態である。(未完)

動詞の時法の研究 (三)

松下大三郎

追想態と非追想態

追想態は從來過去と稱したもので文語で云へば「き」「けり」「けむ」の附いたものであるが「過去」と云へない理由がある。

追想態は主観時法の一態であつて事件を主観の時的進路の後方に在るものとし其れを顧念追想するとして考へた事件觀念を表はすものである。

山里の檣の板戸も「さゝさりき」、「頼めし」人を「待ちし」宵より。

の「」の様なのが即ち追想態である。「さゝす」「頼むる」「待つ」といふ事件を主観の時的経路の後方に在るものとして之を顧念追想するのである。

從來こゝにいふのを過去態と云つて過去態は過去の事件を表はすものだと言つた。西洋文典も日本文典もさうである。併し追想態は必しも過去の事件を表はすとは限らない。

眞清水の岩間を潜る音聞けば掬はぬ先に「涼しかりけり」拾玉集

秋に別れしより行年身の止ること「悲しかりけれ」詞

する行く秋の風に亂るゝ刈かやはしめゆふ露も「止らざりけり」。

榊葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞ圓居「せりける」。

などは現在の事件を表はしてゐる。決して過去ではない。之を過去だと云ふのは「けり」を過去ときめてかゝるからであつて、虚心に考へれば完了とは云へるかも知れないが、過去とは決して云へない。完了ならば現在完了であつて過去ではない。然るに「けり」を使つて追想態にしてゐる。これは事件は過去ではないが、觀念の取扱に於てその事件を主観の時的経路の後方に在るものとして顧想したのである。全く觀念の取扱方である。

明日は日曜かと思ひしに「土曜なりき」。

俊頼は藤原かと思ひしに「源なりき」。

の「源なりき」は俊頼が古人であるから過去の事件だと云ふなら、明日は未來であるから「土曜なりき」は未來の事件だと云はなければならぬ。併し明日が日曜であること、俊頼が源姓であることは過去でも未來でもなく全く不拘時の問題である。不拘時の問題ならば「土曜なりき」「源なりき」は過去と云へない。これは唯自己の思想上に於て日曜と思ひ藤原と思つたのが誤であつたといふことが過去なので主観であること源であることは決して過去の事件ではない。それを唯觀念の取扱上主観の進路の後方に在るものとして顧想しただけである。

若し「けり」を過去の記號だとし「けり」の附いた動詞を過去態といふならば

「昔竹取の翁といふもの「ありけり」野山にまじりて竹を取りつゝ萬づのことに「使ひけり」。

(2) 昔竹取の翁といふもの「あり」。野山に入り竹を取つて萬事に「用う」。

(3) の「有りけり」使ひけり」は過去の事件を表はすから、有記號の過去態、(2) の「有り」用う」は無記號の過去態と云はなければならぬ。記號が有つてもなくても過去の事件を表はす者は過去態でなくてはなるまい。そうして「有りけり」と「有り」とは單に記號の有無だけの區別になつて仕舞ふ。之を辯ずる人は「有りけり」は過去を過去として表はし、「有り」は過去を現在として表はすのだと云ふであらう。問題はそこだ。過去を過去として表はしたり現在として表はしたり勝手に變へるとは人間の力で出来るものではない。過去は神の力でも現在にはならない。過去を過去として表はし現在として表はすといふことは單に觀念の取扱方である。眞に過去を現在として仕舞つては竹取の翁が現代の人になつて仕舞ふ。竹取の翁は依然として古の人であるけれどもその存在の觀念を主觀の時的進路の後方に置いて回顧するとして考へるか、主觀と同位置に置くとしてそのまゝ考へるかといふに止る。後方に置いて回顧するとして考へれば追想態で、同位に置くとしてそのまゝ考へれば非追想態である。此れは唯觀念の取扱上の區別であつて事件が過去であるか現在であるかは別問題である。

追想態の記號は文語では「き」と「けり」と「けむ」である。其の活用は

ラ行變格 けら 【けり】 けり ける けれ けらく

特別變格 せ ○ き し しか しく

特別變格 ○ ○ けむ けむ けめ けまく

である。

此の活用で問題のあるのは「き」の第一活段「せ」である。此の「せ」は「ば」を附けて「行きせば」(行つたならば)、「無かりせば」(無かつたならば)などいふ様に使ふものであるが、之をサ行變格の「せ」だと思ふ人がある。余は賛しない。このことは後で「まし」の第一活段「ませ」の所で論ずることにする。

「けり」の第一活段「けら」は古く「けらす」などと云つた例が有るだけである。「けり」の第二活段は、ラ行變格であるから形成上有るべきであるが使ふ必要がない。第二活段の用法は「て」を附けて方法格にすること「ぬ」「つ」などを使つて送想態にすること「けり」「き」を附けて追想態にすることに在る。然るに動詞へ「けり」「き」「けむ」の附いたものは追想態であつてこれには方法格の必要がなく、追想したものをも今更送想する譯もなく、又追想を重ねる必要もないから「けり」や「き」に第二活段は不必要なのである。

第六活段「けらく」「しく」「けまく」は有活用のもが無活用化する段であつて動詞性名詞にもなるが又名詞にならず(即ち外延性を帯びず)に動詞そのまゝの實質を表はすに用ゐられる。「けること」「しこと」「けむこと」といふ意になるのである。

「き」と「けり」は等しく追想態ではあるが少し違ふ。「き」の方は事件觀念を主觀の進路の後方に在るものとしそれを追求して引つ摺へるとして考へるのであつて、主觀が事件觀念に對して親しい。「けり」の方は主觀の後方にある事件を顧みるだけで追攝して引つ摺へるのではないから、事件に對して冷淡である。そこで「けり」の方は説明的となり「き」の方は記述的となる。「けり」は説明的であるから物語などで地の文に多く用ゐられ、「き」の方記述的であるから對話に多く用ゐられてゐる。又「き」の方

は記述的であるから實際の過去に用ゐられるが、「けり」の方は説明的であるから、散文では實際の過去に用ゐる場合も多いが和歌などでは實際の過去でない思想上の過去に用ゐられる場合が多い。和歌などで「何々けり」と云ふのは多くは事件は現在であつて自分がそれを知らなかつたと、自分がそれを誤解して居つたとが過去であつてその過去に於ける知識的缺陷を現在の觀察に由つて補充する場合に用ゐられる。

音にのみ聞きて「やみにし」菊の花夢にも色は見えず「なりにき」。射恒集

「思ひき」や、秋の夜風の寒けくに妹なき床に獨ねむとは。元輔集

立ち返り花をぞ我は「怨みてし」、人の心の長閑ならねば。兼輔集

斯ばかり戀ひむものとし思はねば妹が袂を枕かぬ夜も「ありき」。六帖

人知れぬ宿に「すみせば」郭公うき五月雨は知られざらまし。兼輔集

百敷の庭にかきしく白砂の「されたりき」とも「思はざりし」を。

「植ゑし」時花待遠に「ありし」菊移ろふ秋にあはむとや「みし」。六帖

雪降れば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ「咲きける」。六帖

年月は昔にもあらず今日なれや、戀しきことは「變らざりけり」。六帖

人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香に「匂ひける」。古今集

深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜「つみけり」。古今集

これらの例に由るも「き」を用ゐた追述は事實上の過去と一致することが多く、「けり」を使つた追述は單

に思想上の過去である場合が多いことを證する。併し散文では「けり」も實際の過去に用ゐられる場合が可なり有ることは勿論である。その例は物語に最多い。

「き」も「けり」も追想態の確實態であるが「けむ」は追想態の推想である。

いそのかみふるの山邊の櫻花「植ゑけむ」時を知る人ぞなき。遍照集

たらちねは斯れとてしもうば玉の我が黒髪をなですや「ありけむ」。同上

「けむ」の追想は大抵實際の過去と一致する。

「き」はクシク活的の活用である。それをカリ活的活用にしたのが「けり」で、「けり」の第一活段「けら」を「け」として「む」を附けたのが「けむ」である。併し「けむ」は「む」とは違ふ。「む」は迎想態だが「けむ」は追想の推想であつて、迎想態ではない。口語の「たらう」は追想の迎想であるから「けむ」と違ふ。尙ほ迎想の所で述べる。

口語の追想態はどうであるか。口語には追想態は殆どない。全然無いことは無いが殆ど無い。「た」は追想態ではない。送想態である。口語の追想態は唯「け」を用ゐることが稀に有るだけである。

あゝ「そうだつけく」、怠けて居るんちや「無かつたつけ」

などの様に「た」の下と「た」の下へのみ使はれる。それも餘り多くは使はれないから大體に於て口語には追想態はないと云つて善い。

口語の送想態「……た」は過去の事件も完了の事件も未來完了の事件も皆表はし得る。

昨年の夏私は北海道へ「行つて見た」が貴方は東京に「いらつしやいましたか」又何處かへ「御出

でしたか」

の「」などは過去の事件であるが觀念の取扱は唯主觀の背後へ送られて居るだけである。過去の事件には相違ないが追想態ではない。今の人は古人と觀念の取扱方が違ふのである。古人の追想したことを今の人は送想してゐる。古人は追想にも「き」と「けり」とを區別し送想にも「ぬ」と「つ」と「たり」とを區別したから云ふに云はれぬ趣が有る。今の人は凡べて一つの「た」で送想するだけである。此の點に於ては口語は古文よりも劣化したものである。但し他の點に於ては發達した點が多い。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「た」は東京語では二つ重ねることは無いが、二つ重ねて使ふ地方が澤山ある。

「花咲かば」告げむと云ひし山里の使は來たり、馬にくら「おけ」。

明日御宅へ「向ひます」。

の「」は未來の事件であるが、動詞の態は非追想態である。之を現在と云つては違ふ。

非追想態は「む」の附いたものをも含むのであるから、右の例の「花咲かば告げむ」の「告げむ」なども非追想態である。

非追想態にも確實態と推想態とがある。推想態へは「らむ」を附ける。

以上説いた追想態と、非追想態は主として非送想態の追想態と非送想態の非追想態であるが、送想態の追想態も送想態の非追想態も勿論ある。

送想態の追想態は動詞へ「ぬ」「つ」「たり」「り」の附いたものへ更に「き」「けり」「けむ」を附けたものである。口語にはない。

岩そゝぐ垂氷の上に早蕨のもえ出づる春に「なりにける」かな。六帖
待つ人もこのものからに鶯のなきつる枝を「折りてける」かな。六帖

何處まで春はいぬらむ。暮れはてゝ別れし程は夜に「なりにき」。六帖

こそ「見てし」秋の月夜は照せれど逢ひ見し妹はいや遠さかる。萬葉

これは事件觀念と送想的運用を一緒にして一つの觀念と見、それを追想的に考へたのである。

迎送態と非迎送態

迎送態は從來「未來」と稱せられたもので文語ならば「む」「じ」「まし」、口語ならば「う」「よう」「まい」の附いたものなどがそれであるが、未來と云へない理由がある。

迎送態は主觀的時法の一態であつて事件を主觀の時的進路の前方に置いて我に向つて近づき來るものとし其れを迎へるとして考へたのであるが、未來と云へない理由がある。

迎送態は主觀的時法の一態であつて事件を主觀の時的進路の前方に置いて我に向つて近づき來るものとし其れを迎へるとして考へた事件觀念を表はすものである。例へば

明日人を「訪はむ」。

彼恐らくは「來らじ」。

明日彼の本を「買はう」。

來年歐米漫遊に「出懸けよう」。

今日は雨は「降るまい」。

の「」などはその事件を我が主觀の時的進路の前方に置いて其れが漸次我に向つて近づき來るものとし其れを迎へるとして考へたのである。そうして右の例の「」は其の事件が實際未來に屬して居るから之を未來態と云つても大した差支はないが、「む」「じ」「まし」「う」「よう」「まい」は迎想の記號であつて未來の記號ではないから必しも右の例の様に未來の事件を表はす場合にのみは使はれない。過去の事件にも用ゐられる。

時宗なかりせば我れ元に「臣妾たらむ」。

あを待つと君がぬれけむ足引の山の半に「ならまし」ものを。

家康が早く死んだら豊臣氏の天下は「そのまゝたらつ」諸侯も「叛くまい」。

の「」などは過去の事件である。過去の事件ではあるが觀念の取扱上に於てそれを我が主觀の時的進路の前方へ置いてそれを迎へるとして考へた云ひ方である。我の元に臣妾たらむといふことは數百年の

過去であるが、併し其れは時宗が無かつた場合を云ふので實在しない事件である。唯思想上の推理に過ぎないのであるから想像上その「臣妾たらむ」といふ事件を主観の時的進路の前方に置いて其れを迎へるとして考へるのである。唯迎想するだけで事件は過去であるから之を「未來」といふことは出来ない。又

自分は今病床に於て故郷を思つて居る。故郷の父母も定めて自分のことを「心配して居よう」。
今彼の人「不在だらう」。電話をかけるまでもない。

の「」は現在の事件を主観の時的進路の前方に置いて其れを迎へるとして考へ。

どんな人でも百年とは「生きられまい」。

燕は飛行機よりも「速からう」。

の「」などは過去現在未來といふ様な具體的の事件でなく不拘時性の抽象的事件觀念を主観の前方に置いてそれを迎想するのである。迎想ではあるが未來ではない。

迎送態を示すには活動辭即ち所謂助動詞「む」「じ」「まし」、口語では「う」「よう」「まい」を附ける。

特別變格	○	○	む	む	め	まく
同	○	○	じ	じ	○	○
同	ませ	○	まし	まし	まし	か
特別變格	○	○	「う」	「う」	「う」	「う」

(終止格)
(連體格)

同 ○ ○ ○ 「よう」 よう ○
同 ○ ○ ○ 「まい」 まい ○
これが動詞へ附くには

む、じ、まし、「文語」、第一活段へ附く。

う

「口語」、四段活、特別サ行變格(カリ、タリ、ナリ)特別サ行變格(デス、マス、ゴザンス)の第一活段へ附く。

よう

「口語」、上下一段活、カ行變格、サ行變格の第一活段へ附く。

まい

「口語」、四段活、特別サ行變格へは第三活段或は第四活段へ付き、上下一段活カ行變格サ行變格へは第一活段へ附く。

「む」の第六活段に「まく」がある。これは迎想的運用性と事件觀念とを一括して一つの實質と見る語であつて名詞にも副詞にもなる。「……むこと」といふ意味である。

「まし」は「む」がクシク活風に活用し懸つて十分にそうならずに終つたものである。「まし」の第二活殺へ「まく」を置く人があるが「まく」は「む」の第六活段で「曰ふ——曰く」思ふ——思はく「けり——けらく」などと同じ形式の變化である。「まし」とは意味が違ふ。又「まく」を「む」の變化でなくて「まし」の第二活段だとしたならば「けまく」「けむ」の變化と見るとは出来なくなるであらう。所が「けまし」といふ語はないから「けまく」を「けむ」の變化と見なければ「けまく」だけ單獨の語となつて仕舞ふ。それでは困るだらう。

口語の「う」は「む」が母音だけになつたものである。文語では「む」を父音だけにして「ん」と讀む。「う」は「う」がイ列エ列などの語尾へ附いて間音が生じた時に出來たものである。「まい」は「まじき」の音便「まじい」の轉じたものである。

非迎想態は動作動詞の主觀の時法の一態であつて、事件を主觀の時的進路の前方に置いてそれを迎へるとして考へたのでない事件觀念を表はすもので、その形より云へば「む」「じ」「まし」「う」「よう」「まい」などの附かないものである。

「らむ」「らし」の意義 非迎想態の推想に「らむ」の附いたのがある。これは迎想とは違ふ。「らむ」の附いたのは非迎想であると同時に非追想である。

吉野山峯の白雲いつ消えて今朝は霞の「立ち變るらむ」六帖
などは現在のことを非迎想非追想的に推想するのである。

蓬萊と「いふらむ」山に逢ふやと竹取物語

などに不拘時の事件の推想である。枕草紙に

山鳥は友を戀ひて鳴くに鏡を見せれば「鳴き止むらむ」よ。

とあるは故事を云つたのであるから過去の推想であらうか。又故事より一般化した不拘時の推想であらうか。過去の推想とも見られるが併し迎想ではないから「鳴き止みけむ」とは違ふ。

「らむ」「らし」は迎想ではないから「む」とは違ふ。「らむ」は假定機會格の下には使ひにくい。使つた例は甚だ稀である。併し絶對に使へないといふ道理はない。元輔集に

松をのみ引きて歸らば梅の花思ふ心の「残るらむ」かし。

とある。「歸らば」といふ假定の下に使つてある。枕草紙の例も過去の推想でないとするれば、不拘時の推想となるのみならず「見せれば」が不拘時的の假定となる。「らし」は萬葉卷二に

夕されば「めし給ふらし」明けければ「召し給ふらし」。

などの例がある。これは今日尙此の世に在さばといふ假定のもとに使つたのである。

遠江駿河信濃邊の口語では「らむ」を「ら」と云ふ。そうして假定機會格も第一活段へ「ば」を附ける用法がある。そうして迎想は「す」を使ふ。「す」は「む」に當る。

(一) 君が遊山に行かば息子も行かむと云はむよ。

(二) 貴方ん遊山に行かば息子も行かすつて云はすよ。

(三) 君が行かば息子も行かむと「云ふらむ」よ。

不用

(四) 貴方ん行かば息子も行かすつて「云ふら」よ。

(五) は文語で(1)は遠州語であるが、兩方とも(2)の様には云へない。遠州語では未來の事件の假定の下には「ら」を使はないのである。遠州語の「ら」の用法は文語の「らむ」の用法とこう似てゐるのであるから、その研究は文語の「らむ」の研究に資する所があらうと思ふ。

遠州語の「ら」は現在の事件の假定ならば假定の下でも使へる。

雨ん降るかぬ。さうかぬ。雨ん降らばあの子は傘なすて「困るら」よ。

と云ふ風には云へる。「降らば」は假定ではあるが未來ではない。現在の假定である。

雨の降るといふか。雨の降りては彼は傘の無きに因すらむと云つた譯になる。それならば元輔集の「松をのみ引きて歸らば」も松をのみ引きて歸つた上で讀んだ歌であつて「こんなに松だけ引いて歸つては」と云ふ意味で現在の事件の假定であると見るべきであらうか。

「じ」の第一活段 從來「じ」の活用は「〇、〇、じ、じ、じ」とせられた。第五活段は「こそ」の結になるので設けられたのであるがこれは第四活段が「こそ」の結になるのであるから「〇、〇、じ、じ、〇」とすべきである。所が此の「じ」には第一活段があつて「ばや」が附く。拾玉集卷四の中程に

我が心隠さじばやと思へども見る人も無し知る人も無し。

といふ例がある。それ故「じ」の活用は「じ、〇、じ、じ、〇」である。但しその例が澤山あるのではないから一般の法書に書くには「〇、〇、じ、じ、〇」でよからう。

「まし」の研究

「まし」は實に奇異な辭で從來研究されて居なかつた。三氏重松氏はこれを研究して

「まし」は過去の事件の假定的想像が本義である。實際の事には決して使はない。必ず反事實の事件でなければならぬ。轉じて未來にも使ふが反事實でない未來の事件に使ふのは誤である。と斷定した。松尾捨次郎氏は往年國學院雜誌々上で略三矢氏の説を認容したが、其れは大體の話で、假定でない事件に使つた例も少しはあるといふことを蜻蛉日記の例を擧げて論じたと記憶する。三矢氏の研究は實に「まし」の解釋に一時期を畫したものと云へよう。なる程萬葉集などのほさういふ例が多い。平安朝初期のものもさういふ例が多い。

兼てより君來まさむと「知らませ」は門に宿にも玉敷かまし」を 萬葉集

如く我が子日の松に「ならまし」をあな涙まし人に引かるゝ 朝恒集

の「」は皆過去の事の假定である。「君來まさ」と知らざりし故に玉敷かざりし」を悔い又「子日の松にならざりし」を悔いて「玉を敷かうのに」「子の日の松にならうのに」と思ふのでつまり出來ない相談であると説き得られる。併し實際はこんな都合の善い例ばかりは出て來ない。三矢氏の説に不利益な例も出て來る。

夕されば召し給ふらし明けくればめし給ふらし。神岳の山の紅葉を今日もかも「問ひ給はまし」

明日もかも「問ひ給はまし」 萬葉集

行き廻り今こむ秋を戀ひそへて今宵ばかりは逢ひや「しなまし」 朝恒集

※梅の花唯にやは見る春雨にぬれつゝを尙折りや「してまし」 同

※我が袖に移らば移れ手もたゆく摘みや「入れまし」撫子の花 伊勢集

孰くにも咲きはすらめど我が宿の大和なでしこ誰に「見せまし」 同

見る人もなき山里の櫻花はかの散りなむ後ぞ「咲かまし」 同

水の上に浮べる舟の君ならばこゝぞ泊りよ「云はまし」ものを。同

夢ならで逢ふこゝ難き世の中は大方床を起きずも「あらまし」 同

千々の色に移りし秋は過ぎにけり今日の晴雨に何を「染めまし」 同

河霧の中に君ますものならば晴るゝまに「嬉しからまし」。六帖

此等は皆未來の事件だ。「まし」を過去に用ゐるのが本義だといふ説は不可である。右の中※印のものは反事實とは云へない。反事實にのみ使ふといふ説は通らない。そこで余は下の如く考へる。

「まし」は事件の假想的觀念に對する迎想を表はすものである。そうして過去と未來とは拘らない。又その假想が實際に一致するとしないうちに拘らない。即ち反事實でなくとも、假想であれば善い。そうして又過去に使つても迎想の意味はない。

假想はその對象の實在を豫想しない。但し偶然に實在しても構はない。唯實在するとして考へなければ假想である。殊に未來の事件であれば實在しないとは限らない。實在するかも知れないにしても實在するとして考へなければ假想である。過去の事件であれば實在したことが分つてゐる以上は是れを控へ目にして假想する必要がないから、苟も假想である以上は先づ實在しなかつた事である。併しそれと自然的關係でさういふことが分るので「まし」そのものにその事件が非實在であるといふ意味はない。

「まし」には過去の意味はない。追想の意味もない。それならばどうして過去の想像に用ゐられるかといふと、それは假想であるからである。假想となれば過去の事の假想でも思想の上から云へばまだ經驗に上らないことであるから未來も同じである。其れ故過去の事でも假想ならば「まし」を用ゐることが出来る。そうしてそれは迎想である。假定的にその經驗される機會を豫想するのである。「急がずば濡れざらまし」などいふのはそれである。急いだから却つて濡れたのは事實であつて過去であるが、急がないことと濡れないことは過去の假想であつて、思想上から云へばまだ經驗に上らないか

ら未來も同じである。その未経験のことを假想的に迎想するのである。

「まし」が假想であることは争はれない。それは過去の事實の推想に用ゐられないことに由つて明瞭である。

昨夜早く家に歸りせば雨に「あはざらまし」を遅く歸りしかばづゝ濡れになりき。
といふ様に假想には使へるが、

(一) 雨には「あはざりけむ」、濡れたる様子もなし。

(二) 雨には「あはざらまし」、濡れたる様子もなし。

(一)を(二)の様に云ふことは出来ない。この例で「まし」が事實を表はさないことが分る。且つ「雨には逢はざらまし」と云ふと未來のことに様の聞こえる。それは「まし」が假想であることが證明されると同時に「まし」に過去の意味のないことが證明される。

「まし」が過去の事件に關して必ず假想である以上、未來の事件に關しても亦假想であることは想像に難くない。凡そ同一の詞を同じ人が使ふのに二様の相容れない意味に使ふことは恐らくは無からう。過去の事件に對して假想であるならば未來の事件に對しても假想であるべきである。それ故前に舉げた未來に使つた諸例も皆未來の事の假想であらうと思はれる。

梅の花唯にやは見る春雨に濡れつゝを尙折りや「してまし」

の「してまし」とは「折らう」といふ實際の決心を表はしたものでない。「折らう」といふ様な、事の當然を表はしたものに想違ない。當然は事實とは違ふ。矢張假定である。「外の散りなむ後

ぞ咲かまし」なども「咲くだらう」ではない咲いて貰ひたいので「咲くべきであらう」といふ當然を表はしたものである。その外の諸例皆そうである。「まし」には必ず「べき」といふ當然或は、假想の意味がある。そうして其れを主観の進路の前方に置いてそれを迎へて相逢ふ機會のあるべきことを豫想するのである。即ち「べき」の意味と「む」の意味を兼ねたものである。そうして過去若しくは追想の意味はないから過去の事件であつても口語で云ふならば

(一) 兼ねてより君來まさんと「知らませは」門に宿にも玉「しかまし」を。

(二) 前から貴方の入らつしやることが「分つうものならば」門へも宿へも玉を「しかうもの」を。と譯すべきである。

前から貴方の入らつしやることが分つたならば門へも宿へも玉を敷くんだつたのに。と譯しては少し具合が違ふ。「まし」には「た」といふ意味はないから。

松尾氏の蜻蛉日記の例は一寸今分らないが恐らく「べき」の意味があるだらうと思はれる。

「まし」を反事實に限るとすると後世の歌人などの使つた「まし」には誤が多いといふことになるが「まし」は唯假想であつて反事實の意味はないとすれば後世の用例も大抵正しいことになる。併し「まし」を「む」と同じ様に考へては少し違ふ。「む」は單なる迎想で「まし」は假想的迎想である。

遠州語の「まし」 遠州の老人の語には「まし」が遺つてゐる。若い人も少しは使ふであらう。併し必ず「たらまし」であつて音便で「たんまし」といふ。その用法は必ず人を誘導する時に使ふのである。例へば「一所に旅行する約束をしたが出發の前夜になつて天氣が悪くなつたとする。一方が一方に向つて

この空模様ぢや連も駄目だに「やめたんまし」。

天氣は怪しいが折角支度をしたに「行つたんまし」。

などといふ。「罷めたらまし」「行きたらまし」の音便である。下へ「よ」を附けて「罷めたんましよ」とも云ふが、それは「まし、よ」であつて「ませう」ではない。遠州の「まし」は誘導であつて「罷めようぢやないか」「罷めつべきではないか」「位に當る。矢張り假定である。「罷めませう」といふ様な實際の決心でなくて對手の返事を聞いてから事が確定するので假定の決心である。決心の假定を利用して誘導或は相談の意を表はするのである。假想の意味は古語と同じだが用法が狭くなつて唯誘導にのみ用ゐるのであるから必未來の事に用ゐる。過去の事は誘導が出来ないから、過去に用ゐる譯はない。そういふ譯で用法は狭いが矢張古語の「まし」と同じである。こういう方言の研究も古語の研究の参考になるだらうと思ふ。

横的迎想態(機會格) 以上説いた迎想態は縦的迎想態であつて活用分段に關係しない迎想態である。即ち連詞又は斷句中の立場に關係しない迎想態である。所が連詞又は斷句中に於ける或る立場(即ち或る格)に於てだけ迎想態を成すのである。第一活段へは「附いた場合、第二三活段へ」とも「附いた場合は如何な」動詞と縦的には非迎想態であつても皆その場合だけは迎想態である。之を横的迎想態といふ。格に命名すれば「ば」とも「と」の附いたのは皆事件の發現の場合を表はすのであるから機會格といふべきであるが、その中第一活段へは「附いたもの第二三活段へ」とも「附いたものは迎想態になるから迎想的機會格といふべきである。

迎想假定機會格

迎想假定機會格

非迎想假定機會格
確定機會格

住 ま みる
聞 か き く む

め け
は

此の分ち方は從來の分ち方と一寸違ふ點がある。

問へば云ふ問はねば怨む。

合へば留り合はざれば去る。

勉強すれば必ず及ぶ。

晴るれば耕し雨すれば讀む。

の 様のものを従ふは確定法と云つたが、これは確定ではなからう。「問へば云ふ」の「問へば」は問ふか問はないかを云ふのではない。問ふか問はないかは別問題である。たゞ問ふとある場合を假定するだけである。論理學でも「禮を知らざれば人に非ず」といふ様なものは假定的命題といふのであるからこれはどうしても假定である。唯

我は今海濱に住めば鯨魚を味ふを得

といふ様なだけが確定である。

確定

市内は水道有れば飲用水便利なり。

具體的

彼は餘りに怠れば落第するならむ。

機會格

假定

迎想的	非迎想的
此處も水道あらば便利ならむ。	何處に拘らず、水道あれば便利なり。
我も怠らば落第せむ。	何人も餘りに怠れば落第す。
具體的	抽象的

「ば」の附いたのは拘束態で「とも」「ども」の附いたのは放任態である。

一切の動詞は「む」「じ」「まし」「う」「よう」「まい」などが附かない限り非迎想態であるが、それは縦的非迎想態である。縦的非迎想態でも第一活段へ「ば」が附けば横的に迎想態になる。「水道有らば」といふのは水道の有るといふことを主觀の前方に置いてそれを迎へるのである。「水道有らむ場合は」と云つた様な心持である。そうして水道の有る無いは別問題であるからこれは假定である。

「む」になせ第一活段がないか。一切の動詞は第一活段へ「ば」を附ければそれで横的迎想態になるから「む」の第一活段へ「ば」を附けて縦横的に迎想態を作らなくても事が済むのである。今「む」の活用を「ま、み、む、め」といふ四段活だとすると「行かむ」の第一活段は「行かま」となる。それへ「ば」を附けて「行かまば」と云つた所で「行かば」と何の區別も生じない。無益な事である。其れ故「む」には第一活段がない。第二活段のないのは「む」は迎想であるから迎想の追想、迎想の追想といふものはないから「む」の下へ「さ」「たり」などを附ける必要がないそれ故である。

然るに「まし」には第一活段に「ませ」があつて「ませば」といふ。それはなぜであるか、それは「まし」

は假定的迎想であるから特に假定を明瞭にするには唯第一活段へ「ば」を附けては物足らない。「まし」の第一活段へ「ば」を附ければ假定が明瞭である。殊に過去の事件などであれば假定を明瞭にする方が真合が善い。

「兼てより君來まさむと知らませば門に宿にも玉敷かましを。」

「兼てより君來まさむと我れ知らば門に宿にも玉敷かましを。」
兩方とも假定であるが、(二)の方は物足りない。

「ませば」「ましかは」はどう違ふか 物集高見博士は「ませば」は歌の語で「ましかは」は文の語だと云はれたが歌の語文の語といふ明瞭な區別の有るものではあるまい。又「ませば」は古く「ましかは」は新しいといふ人もある。萬葉には「ましかは」の例がなく後世の用例には「ませば」は文には勿論、歌にも甚少ない。併しそんな區別は意味の區別ではない。意味の區別はどうであるか、矢張活段の區別である。所が從來「ば」の附いたものは第一活段は假定、第五活段は確定と思つて來た所へ「まし」の縱的假定であることに氣が附かなかつたから「ませば」と「ましかは」の區別が分らなかつた。誰が考へても「ませば」は假定である。それを「まし」の固有の性質(縱的性質)と思はずに第一活段としての個性(横的性質)とのみ思つたからして「ましかは」が説けない。「ましかは」も「ませば」も「ば」の同義假定である。然るにその活段は、確定であると信ぜられた第五活段であるから、どうしても「ましかは」が説けない。そこで活段に關係なく唯「ませば」の同義語とのみ思はれたのである。

「ませば」と「ましかは」の意味の別を知るには「まし」の固有の性質(縱的性質)が假定であること、一

般に活用する詞は第一活段も第五活段も假定機會格になり、そうして第一活段は假定の迎想であり第五活段は假定の非迎想であるといふ縱的意義と横的意義との二面から觀察しなければならぬ。そのいふ風に觀察すれば「ませば」は縱的に假定的迎想であると同時に、横的にも假定的迎想であることが分り、「ましかは」は縱的には假定的迎想であつて横的には假定的非迎想であることが分る。即ち「ませば」はその假定的意義は「まし」が「ば」と同じであるが迎想的意義が「ましかは」よりも明瞭である。

我痛く酔ひぬ。「飲まざらませば」酔はざらましを。

我れ痛く酔ひぬ。「飲まざらましかば」酔はざらましを。

此の人「無からませば」誰と共に語らはまし。

此の人「無からましかば」誰と共に語らはまし。

さらばよと別れし時に「云はませば」我も涙におぼれなまし。伊勢集

山の端を「見ざらましかば」春霞立てるも知らでへぬべかりけり。六帖

敷妙の枕に塵の「居ましかば」起返りにぞ人の訪はまし。兼輔集

「ませ」と「まし」は新舊の別もあらう。併し右の如く活段上の形式的相違があつて譯し云へば

飲まざらませば……若し飲まなからうものならば(若し飲まざらむものならば)

飲まざらましかば……若し飲まなからうもの場合には(若し飲まざらむ場合には)

位の別であらう。併し「まし」の第四活段へ「時」の附いた例もある。

見ず聞かず「あらまし時は」賤機の經緯亂る思ひせましや。伊勢集

「もし見ず聞かずならむか、その場合にはこんなに苦しい思ひはしなからう、見たのが苦の種であつた」といふのである。

「ませば」と「せば」の別はどうか。「ませば」は「まし」の第一活段である。その固有の性質は假想の迎送である。「せば」は「き」の第一活段であるから、その固有の性質は迎想でなく又、假想でなく、實に追想である。固有の性質は斯く違ふにも拘らずその偶有的性質は第一活段であるから兩方とも假想的迎想である。そこで類似して見えるが、「ませば」には追想の意味がなくそうして假想の迎想たる意味は縦横共に具つてゐる。「せば」は追想の意味があつてそうして假想の迎想たる意味は弱い。

世の中に絶えて櫻の「無かりせば」人の心は長閑からまし。古今集

人知らぬ宿に「住みせば」時鳥うき五月雨は知られざらまし。兼輔集

冬枯の宿と我が身を「思ひせば」もえても春を待たましものを。伊勢集

山里に「宿らざりせば」時鳥聞く人もなき音をや鳴かまし。同

「せば」は追想の意味があるから「無かりせば」は「無かりしならば」と云つた様に解して善い。口語では「無かつたらば」と云ふより外はない。「無からませば」の「若し無からうものならば」の意味であるのとは大變に違ふ。

此の「せば」の「せ」をサ行變格動詞の「せ」だとする人がある。大槻博士などもそうだつたと思ふ。併しその活用を「まし」と比較して見、その意味の具合を考へて見ると、どうも「せ」は「き」の第一活段とする方が善からうと思ふ。

ませ ○ まし まし ましか
せ ○ き し しか

どうしても「せ」は「ませ」と同活段「しか」は「ましか」と同活段である。サ行變格の「せ」ならば「宿らざり」などの下には附くまい。「宿らざりす」とは云へまいから。

「まく」が「む」の第六活段であつて「まし」と意味の違ふことは既に論じた通りである。

横的迎想態(命令格) 命令格も横的迎想態である。一切の動作動詞は縦的に非迎想態であつても命令を表はす場合には横的に(即ち偶性的に)迎想態になる。

命令格は拘束的又は許容的に動作を迎想する格である。文語で云へば「行け」「見よ」「行かなむ」「行かね」「行きこそ」「行きこそ」の様なのは肯定で「行くな」「な行きそ」の様なのは否定である。又「行きてよ」「行きね」「行きなむ」などは送想態の命令である。

命令は迎想であるから第一活段又は第五活段を用ゐるのは至當のことである。第一活段は迎想的意義のある程であるから「ば」を附けて機會格にしても「よ」「ね」「なむ」を附けて命令格にしても皆迎想を表はす。又第五活段は拘束と許容に適當な段であるから「む」「び」を附けて「行けば」「書けば」などといふと拘束的機会格となり「じち」を附けて「行けども」「書けども」などといふと放任的機会格となるが、「書け」「行け」といふと命令格によつて拘束又は許容を表はす。

命令は他人に命令するのが普通だが自己に命令する場合もある。口語には此の法が發達してゐる。

えゝ面倒だ、「負けて仕舞へ」。一圓に「負けて仕舞へ」。

彼奴は煩さいことばかり頼んでゐる。構はない、「斷つて遣れ」
おつと危い。「逃げるく」。

これらは自己の決心を許容する意味なのである。こゝに「く」を對己的命令といふ。命令は迎想である。迎想は主觀の時法であるから、必しも未來とは限らない。従來の説では命令はその動作は未來に起るとせられたがそれは英語などのことである。日本語では命令格が非常に變達してゐる。現在に勿論過去にも命令を使ふ。

御歸りなさい。 入らしやいまし。

などは現在歸つた人、來た人に對して云ふので現在の事件の命令である。こゝに「いまし」命令は他人の動作を許容する意である。歡迎するのである。

過去の命令は多くは對己的命令である。過去の動作を命令するといふと奇異に感ずるであらうが、實際を云へば後悔或は遺憾である。咄嗟の間に後悔或は遺憾の情が起つた時その過去の取返しの附かない動作を主觀の前方へ置いて其れを許容或は拘束的に迎想するのである。どんな場合に使ふかといふ、碁などを打つ場合に取るべき石を取ることを忘れて外の處へ石を打つたとする。對手は得たりとその石を繼いで仕剣ふ、その瞬間に、取るべきであつたと氣が附いたがもう晚い。

えゝ「取れく」。取るんだつたい。

といふ様なことを云ふ人がある。此の「取れく」は過去の事の對己命令である。又繼いだ後で其の非を悟つて

「えゝ、そうか。「繼ぐなく」い。毒蛇をやつちやつたい。

などともいふ。これも對己命令である。見て居る人が他人の打つた石の非を見て

う、「取れく」取るんだつたなあ、惜しいことをしたなあ。

などといふ場合もある。これは對他命令である。

古文ならばこゝに「く」を「まし」を使つて

其の石は「取らまし」ものを口惜しきことし給ひつるかな

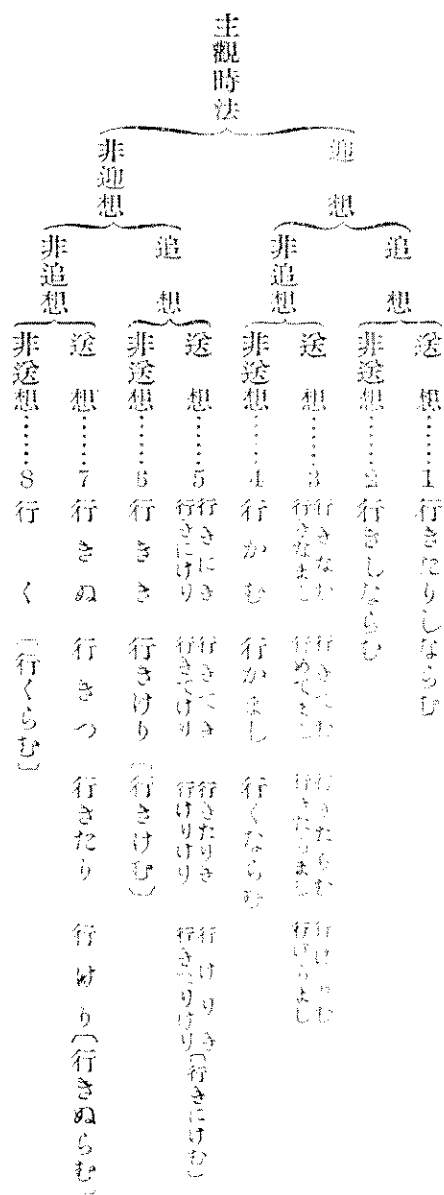
などといふのである。

この過去の事の命令は非だけではない。將基でも玉突でも其の他、動作のすぐ後で其の非を知つた様な場合に用ゐられるのであるが社會の或る方面では一向使はない人が有ると見えてそんな語は知らないといふ人がある。學者方面の人は多くは使ふまい。俗社會の人が多く使ふ様である。

要するに命令は過去にも使はれる。「まし」「む」も過去に使はれる。之を未來態と名づけては不都合である。

主觀時法の結合

一切の動作動詞は迎想態に在るか、非迎想態に在るか何れかであると同時に、迎想態に在るか非迎想態に在るか何れかであり、又同時に迎想態に在るか非迎想態に在るか何れかであつて、如何なる動詞でも必ず此の三種の主觀時態を具へて居る。そこで動詞は主觀時法から觀て次の八態に分れる



〔1〕中の例は推想態である

(1)の「行きなりしならむ」は「行きたりけむ」とは違ふ。「行きたるむ」は(5)に属する推想であつて迎想ではない。古文では事實の推想には(6)の「行きたるむ」を用ゐる。假定には(1)の「行きたらまし」「行きなまし」などを用ゐた。

(2)の「行きたるむ」は古文では事實の推想には(6)に属する推想態「行きたるむ」を用ゐる假定には(1)の「行かまし」を用ゐた。

(4)の「行かむ」「行くならむ」は(8)の「行くむ」とは違ふ。「行くらむ」は(8)に属する推想態であつて迎想ではない。

(3)即ち迎想の非迎想の迎想態には二種の運用がある。文語の「行きなむ」「行きてむ」は未來の事を表はし、口語の「行つたらう」は現在或は過去の事を表はす。そして文語の「行きならむ」「行けらむ」は兩方の意味になる。口語の「たらう」は文語の「たらむ」の音便であつて「たらむ」の第二の運用だけを指へたのである。

二、客観時法

客観時法は動作動詞の一文法的職態でその表はす動作の實際の時を表はすものである。

(一)昨日我れ墨堤に花を賞す(賞しき)。

(二)今日我れ一文を草す。

(三)明日我れ觀月の宴を催す(催さむ)。

(一)は過去の事件(二)は現在の事件(三)は未來の事件である。これは考へ方に由つて左右することの出来ないものである。過去現在未來は客観的であるが、動詞はさういふ問題には甚冷淡であつて客観時を區別する文法的形式を持つて居ない。併し之を表はす方法はある。即ち「昨日」と云へば過去、「明日」と云へば未來であるやうに、さういふ時を表はす修飾語を附ければ客観時が明瞭に分る。そんなことは誠に簡單なことで別に動詞の妙用といふ程のものではない。

併し動詞には過去現在未來といふやうなことでなく別に一種の客観時法がある。それは既然態、現然態、將然態の三つである。

併し「打つ」の様なものは一回打つ意味ならば瞬間的であるが、続けざまに打つ意味ならば継続的であるし、「取る」なども唯手に取る意味ならば瞬間的であるが、受取る手續が面倒である場合にその手續を指すならば継続的であるから

人が鐘を打つて居る。

人が金を受取つてゐる。

などといへば既然態にならずに現然態になる。

又「讀む」「書く」なども本義は継続的であるが、その継続した時間を考へずに一つの動作と見れば瞬間的である。

あの人は本を澤山「讀んで居る」

などといへば既然態になる。

文語も口語と同様に

忘れて居る 逃げて居る

行きて侍り 歸りて候ふ

忘れてあり 逃げてあり

捨てゝあり 挿してあり

などとも云ふが「居る」は凡て「あり」に換へ得る點が違ふ。又多く「て」を略いて

忘れ居る 逃げ居る

行き侍り 歸り候ふ

忘れあり 逃げあり

捨てあり 挿しあり

といふ。

文語も口語も同じである。

徹夜然く雨は降りぬ我妹子が形見の衣を我れ下に「着たり」六帖

久方の空行く月を綱にさし我が大君はきぬがさに「せり」萬葉

春雨の心は君も「知れる」らむ七日し降れば七日來じとや六帖

これは「着てゐる」「知つて居る」の意味で既然である。もと「着てあり」が約まつて「着たり」となり「知りある」が約まつて「知れる」となつたのであるが「たり」「り」は既然が本義である。それから轉して送想態にも利用されるのである。

「あれたれば」影も隠れぬ我が宿の庭長閑なる春の夜の月六帖

白雪と今朝は「積れる」思ひかな。逢はでふる夜の程もへなくに兼輔集

送想態は動作の觀念を送想するのである。動作後の状態を表はすものではない。既然態は動作後の状態を表はすのであるから違ふ。既然態でない客觀時態を非既然態といふ。

現然態と非現然態

現然態は動作の繼續中を表はすものである。動作の時を基準としてその同時を表はすのである。

人が「歩いてゐる」

風が「吹いてゐる」

本を「讀んでいらつしやる」

「遊んでお出です」

などの類である。

「現然態は既然態と同じ様に「居る」「いらつしやる」「御出」を附けて表はすが前に云つた様に繼續的の動作でなければならぬ。

文語では「あり」を附けても善いが矢張繼續的の動作であることが必要である。

又「たり」「り」を附けて表はす場合もある。矢張繼續性の動作であることが必要だ。

見よ、飛行機「飛べり」。

美しき稚兒のいちご「食ひたる」は可愛ゆし。

又繼續性動作の動詞は「つく」を附けた方法格の下へ「あり」を附ける表し方がある。

「歩きつゝあり」 「讀みつゝあり」

などの様にいふ。

現然態は一種の既然態である。廣義の既然態に先後的既然態と同時的既然態とある。前者を既然態と云つて後者を現然態といふのである。狹義の既然態は動作の全部が完了した後を表はすので全部的既然態である。現然態は動作の一部が完了したる後を表はすから一部分的既然態である。一部だけが完了した後即ち動作の全部から見れば同時である。「歩きつゝある」の「歩く」全體を十間とすると一間だけ歩き終つたその後なる時間を「ある」の時間とすると「ある」の時間は次の一間を歩く時間と同時にある次の一間を歩き終つた後の時間も又「ある」の時間とすると次の一間を歩く時間が即ち「ある」の時間である。「歩きつゝあり」とは「歩きつゝあり」といふ様な意味から出來た詞である。

然るに現然態の用法は格の活用である。用法格は第二活段或は第三活段へ「て」「つゝ」を附けたもので

格的正意態である。客觀態を利用して既然或は一部分的既然(即ち現然)を表はすのである。

現然でない客觀時態を非現然態といふ。

將然態と非將然態

將然態は動作の起る前を表はすのである。

字を「書かうとする」

字を「書かむとす」

日が「出ようとする」

日「出でむとす」

花が「咲かうとする」

花「咲かむとす」

又は

意味が「有りさうだ」

意味「有りげなり」

此の子は「泣きさうだ」

.....

雨が「降りさうだ」

.....

此の河は「深さうだ」

此の河「深げなり」

此の橋は「危なさうだ」

此の橋は「危ふげなり」

此の箱は「丈夫さうだ」

.....

の「」などがさうである。「書かうとする」「書く」といふ動作の起るべき情勢を表はすのである。「泣きさうだ」はまだ泣かないが今にも泣くべき様子がある意味である。「深さうだ」は「深い」といふこと

は未來であるが、その深かるべき徴候は現在である。「深い」といふことは徒渉して見るか測量して見るかの後に起るべき状態であるから未來である。

又瞬間性の動詞へ「つゝある」を附けると現然にならずに將然になる。

「出發しつゝ有る」 「起きつゝある」

「出發しようとしてゐる」と同義になる。

將然是迎想を利用しそれへ「と」を附けて結果格にしその下へ「ある」を附けて表はすのと「さうだ」を附けて表はすのと二種ある。「さうだ」に當る語は文語では「げ」であるがこれは「さう」ほど自由でないその代りに「べし」を代用する。

將然態でない客觀時法を非將然態と云ふ。

客觀時法の結合

主觀時法は事件觀念の取扱方であるから無暗に重なることはないが、客觀時法は動作の實際の時を表はすのであるから實際の時に應じて幾つでも相重なる。

唯瞬間性の動作には現然がなく、繼續性の動作には既然がなく靜止的動作には現然も既然もない。その外は幾らでも續く譯である。

既然……………立つて居る

既然の將然……………立つて居ようとしさうだ

既然の將然の將然……………立つて居ようとしさうだ

既然の將然の既然……………立つて居ようとしてゐる

既然の將然の既然の將然……………立つて居ようとして居さうだ

現然……………歩いて居る

現然の將然……………歩いて居ようとする

現然の將然の將然……………歩いて居ようとしさうだ

現然の將然の既然……………歩いて居ようとしてゐる

現然の將然の既然の將然……………歩いて居ようとしてゐさうだ

將然……………歩かうとする

將然の將然……………歩かうとしさうだ

將然の既然……………歩かうとしてゐる

將然の既然の將然……………歩かうとしてゐさうだ

幾らでも云へる譯だが實際に使ふのは此の位な程度であらう。(完)